



## 《大学入試について学ぼう》

大学入試を大きく分けると、一般選抜、学校推薦型選抜、総合型選抜があります。近年、総合型選抜や学校推薦型選抜の募集人員枠が拡大していますが、依然として一般選抜の募集人員枠が全体の約8割を占めています。国公立大学志望者は、まず一般選抜での受験を考えて受験に対応できる学習をスタートさせるべきでしょう。

### 【一般選抜とは】

国公立大学の一般選抜は、1次試験の役割を果たす「共通テスト」の得点と、大学別に実施される「2次試験（個別学力検査）」の得点の合計で合否を判定するケースが一般的です。

国公立大学志望者は、1月中旬に実施される「共通テスト」を原則受験しなければなりません。自己採点を行った後、志望する大学に願書を提出します。注意したいのが国公立大学の出願期間です。国公立大学の出願期間は、共通テストの約1週間後からスタートし、約10日間となっています。思うように得点できなかった場合は、当初考えていた出願校を変更しなければならなくなることもありえます。出願時になって慌てないように事前に複数の候補を挙げておくことが必要でしょう。

各大学で実施される2次試験（個別学力検査）は2月下旬から行われます。2次試験は「前期日程」「後期日程」の2つの日程に募集人員を振り分けて選抜する「分離・分割方式」という制度で実施されます。受験生は「前期日程」と「後期日程」にそれぞれ1校ずつ出願できます。同じ大学・学部を2回受験することも、別々の大学・学部を受験することもできます。また、一部の公立大学では「中期日程」を設定する大学もあります。これらをあわせると国公立大学は最大3校の受験が可能となります。注意しなければならないのは、「前期日程」で合格して入学の手続きを行うと「中期日程」「後期日程」を受験していても、合格の権利を失ってしまうということです。つまり、「前期日程」の合格者は「中期日程」「後期日程」の合否を確認することなく「前期日程」で

受験した大学への入学の判断を迫られることとなります。そのため、第1志望校は「前期日程」で受験するのがセオリーとなっています。また、前期日程と後期日程の募集人員の割合は8：2と「前期日程」の割合が高くなっており、昨年度本校における前期日程合格総数は98、後期日程合格総数は36となっています（中期日程合格総数は6）。

国公立大学の一般選抜でもう1つ気をつけなければならないのが2段階選抜という制度です。これは共通テストの成績を用いて2次試験の受験者を事前に選抜したうえで（これを第1段階選抜といいます）、2次試験を実施する制度です。選抜が2段階に分かれていることから2段階選抜とよばれています。2段階選抜の実施の有無は大学によります。また、第1段階選抜の実施方法も大学に委ねられています。多くの大学では「志願者が募集人員の〇倍を上回った場合、第1段階選抜を実施する」としており、志願者数の状況によって第1段階選抜の有無が決まります。そのため、実際に2段階選抜が実施されるのは、志願者が集まる難関大学や医学科が多くなっています。段階選抜の実施を予定している大学では、共通テストの成績次第で2次試験を受けることなく不合格となる場合もあるわけです。国公立大学志望者は、まず共通テストでしっかりと得点できる力をつけることが大事といえるでしょう。



### 【学校推薦型選抜（公募制）とは】

国公立大学でも全体の9割以上の大学が学校推薦型選抜を実施しています。近年、東京大学や京都大学などで推薦型の入試を実施するなど、難関国立大学でも広がりを見せています。ただし、国公立大学の学校推薦型選抜は、私立大学に比べて募集人員が少なく、出願条件のうち「学習成績の状況4.0以上」など厳しい成績基準を設けている大学があるほか、1高校からの推薦人数が制限される場合は、出願前に学内で選抜が行われるケースも少なくありません。また、国公立大学の場合は、共通テストを課す場合と課さない場合の2タイプに大別され、その入試日程も大きく異なります。

2021年度入試から、小論文など受験者自らの考えに基づき論を立てて記述させる評価方法のほか、プレゼンテーション、口頭試問、実技、教科・科目に係るテスト、資格・検定試験の成績、共通テストなど、学力を確認する評価を実施することが必須となりました。国公立大学では共通テストを課す大学が多くなっています。また「面接」「小論文」を課す大学は多く、口頭試問を含んだ面接や学科に関連した専門的知識を要する小論文が課されることも珍しくありません。

国公立大学の医学科でも多くの大学で学校推薦型選抜が行われます。なかでも特徴的なのが、出身地域や卒業後の勤務地等に制限を設ける「地域枠」の学校推薦型選抜で、全50大学のうち39大学で実施されています(2021年度入試)。地域によっては医師不足が深刻となっており、将来地元に残って活躍する医師の育成が地域の課題となっているからです。そのため、地域枠で合格・入学すると、卒業後に特定の地域で医師として働くことを条件に奨学金が受給できるといった例も少なくありません。

### 【総合型選抜とは】

総合型選抜(旧:A O入試)とは、エントリーシートなどの受験生からの提出書類のほか、面接や論文、プレゼンテーションなどを課し、受験生の能力・適性や学習に対する意欲などを時間をかけて総合的に評価する入試方式です。従来の入試方式と比べると、「高い学習意欲」「学びへの明確な目的意識」が選抜基準として重んじられているため、選抜方法もその点が判断できるような内容となっています。出願時に受験生自身が作成して提出する書類が多いことも特徴です。2021年度入試から、学校推薦型選抜と同様に、各大学が実施する評価方法に、共通テストを含む教科・科目に係るテストや小論文、プレゼンテーションなど、学力を確認する評価方法を活用することが必須となりました。

国公立大学の総合型選抜では、出願9~10月、合格発表11~12月上旬といった入試日程が一般的です。出願条件は、「学習成績の状況」の成績基準がなかったり、高卒生でも出願できるなど、学校推薦型選抜より緩やかな場合が多いです。ただし、大学によっては「英検などの有資格者」「全国コンテストの上位入賞者」といった条件が加わっていることもあります。

選考方法は1次:書類審査、2次:面接(プレゼンテーションも含む)・小論文といった選抜型タイプが一般的です。このほか、セミナーやスクーリングなどに出席してレポートを提出させるといったものもあります。また、基礎学力を測るために、共通テストを課す大学は増加傾向にあります。

総合型選抜は一般選抜や学校推薦型選抜に比べると、大学も選抜に時間をかけており、受験生側にも労力がかかります。また、出願時に提出するものも多岐にわたる場合が多く、事前準備が他の選抜以上に多いことも特徴です。受験を考える人は早い時期からの対策が必要となります。【河合塾 Kei-Netより引用・抜粋】

## 《学年別にやって欲しいこと》

### 【高1】文理選択を、特に英数国の学習を大切に

高校1年生の段階では、まず「秋までに文理選択をする」ようにしましょう。休みの日などを利用して興味のあることと向き合い、保護者の方や先生など、身の回りにいる「大人」の話聞くようにしてみてください。

最終的な判断をした後は、「覚悟」と「期待」を胸に切磋琢磨していこう。



### 【高2】志望校の入試科目・配点を書けるように

高校2年生になったら、大学名・学部学科名まで書けるようにしましょう。そうすることで、入試科目の確定ができます。入試科目や配点の割合を見て、文理にあわせた学習が必要です。部活動なども責任を負う学年として忙しくなります。学習時間の確保を心掛け、自学習習慣を確立しましょう。作ったペースは崩さないように心がけましょう。



### 【高3】夏は基礎固め、演習・応用は秋から

高校3年生になったら、第一志望は変えずに出願校決定に向けて意識していきましょう。学習のポイントは、夏までは基礎固めを徹底すること。秋から演習・応用に入れるようにしましょう。演習に入りたい気持ちを抑えて、基礎に立ち返る勇気をもちましょう。また、模試のスケジュールに合わせて目標を決め、準備して挑みましょう。

基礎  
基本が大切